

石の仏に見る隠された顔

— 石仏を考える —

石仏のイコノロジー⑦

★ これまでの経緯

「石仏にキリシタンの痕跡がある」。

そのように考えるようになって、路傍の石仏に注意を払い、調べ始めてからまだそれほど日を経っていない。人に問われて、「隠れキリシタンのことを調べています」と、言う、「長崎のですか」と聞かれてしまう。「隠れキリシタン」の問題は東海地区には縁がないようだ。

「いえ、名古屋周辺ですよ」というと、「この辺り、そんなことがあったのですか?」と、不思議がられてしまう。

発端は、浜松市細江のお寺で見かけた子安観音にピエタの像が重なって見えたことである。そのきっかけは長野県塩尻市の牛伏寺で見たり、メートル程の子安観音だったかも知れない。ただ、ピエタ像と牛伏寺のそれとではイエスの頭が左・右逆になっていたのである。しかし、細江の子安観音像は40センチほどではあったが、ピエタに見えてしまったのである。もちろん子安観音は厳密には仏教の観音像の中には含まれないわけだが、歩くほどに子安観音に出会う回数が増え、子安地藏(地藏が子供を抱いている)の存在も知ることになる。そして、奥三河の三十三観音霊場など、観音信仰の霊場を巡るなかで石仏の持ち物(錫杖)、飾りなどに異和感を感じるようになった。仏教美術の立場か

石の仏に見る隠された顔

春日井 真英

らは、仏像などはしっかりとした儀軌に則って造られているという。そのような霊場の三十三観音の中に混じって幼子を抱く観音像は心持ち一寸脇に置かれている。つまり、他の三十三観音とは明確に区別されていたことになる。そのことに気がついたのは最近のことだった。はじめは子安観音像の存在に気がつけば、それで満足だったのだが、他の観音像との位置関係、置かれ方の違いに気がついてからは三十三体の観音像の持ち物や、宝冠等に眼を向けるようになった。そして石仏の顔面に十字架を見ることが出来るようになった。そのことについては、すでに別稿で触れているので、ここでは触れないでおく。もちろん、三十三観音や他の石仏の顔に十字架を見ることが出来るのである。そのことに気がついたとき、人々の信仰の強さを垣間見れたと言った良いだろう。一般の石仏の中に紛れ込ませながら、仲間達に自分の存在を示すメッセージがそこにあっただけである。このことは、気づかない者の立場からすれば、誰にも気取られることなく各地で朽ちるまで点在して行くことになる。気づいたもの達にすれば元気づけられる可能性はある。いうならば潜伏信徒の組織(コンフラリア)があることを伝えていたものかも知れない。これら路傍の石仏の存在が信徒組織の存在を暗示するものであったかどうかは、今のところ不明である。なぜならば、東三河の旧街道筋ではキリシタンは存在しなかったと一般的に言われているからである。しかし、旧街道の繋がる先が下伊那

であったことは興味深い。山間の旧道、集落の外れなどで垣間見る子安観音等に十字架などの存在に気がつく、石仏はこれまでのように、単に子宝が授かることを願うものや、子供の成長を祈るものではなくなってしまう。

筆者は、路傍の石仏を探しながら、地域の寺や、共同墓地での調査を行っている。過疎化に伴って都市部に出て行った方々の墓終い等でお寺の中の墓石や石仏が整理され、墓石などが一カ所に寄せられ、重ね上げられてしまっているため、古い墓石や石仏を見つけることが困難になっているが、時に興味深い事例などに出会うこともある。だが、墓石の表の彫り方が薄かったり、風化が進んでいたりしているため見辛いものが多い。集落でも寺を有しているところでは墓地の存在は判りやすい。しかし、廃仏毀釈などの影響で寺がないところでは、共同墓地あるいは昔ながらの埋め墓、寄せ墓（家の近くに詣りやすいようにお墓を寄せる）は、余所者には、その所在を知ることが難しい。つまり基本的に墓地は大変判りにくい所に点在しているからである。共同墓地、寄せ墓などは日常の生活圏からは見えない所にある。表通りを歩くだけでは、見つけることが出来ない。ひっそりと山陰に祀られていることが多い。それは、その集落、あるいは家の歴史に触れることでもある。簡単に言えば、その家に縁のある人が葬られているから、墓を見る事によってその集落や家の歴史を読み取ることもなる。墓石は自然石でできたものであったり、板碑であったり、加工されたものであったりする。簡単に言えば今風のものの、あるいは将棋の駒のように先端の方が三角形（全体としてみれば五角形の駒形墓石）であるが、筆者が関心を持つのはこの駒形墓石の中の頭頂部（一般に家紋が彫られるところ）に円形が彫られているものである（この円形の丸印については山内強氏や小堀千明氏が会津藩のキリシタン研究でも関心を示している）。さらに、台に彫られている蓮の連弁の数（一般的には八葉蓮華で八であるが、五、七もしくは十などのものもある）であ

り、また一柱の墓石に彫られている戒名などである。ときには三名、彫られていることもあるが男女の組み合わせを考えてみると興味深いものがある。さらに「◎◎童子、△△童女」、しかも雪、泡などのような儂い字が当てられている子供だけの名前のものである。墓石を建てるという言葉にも大変な事だと考えられるので、関心を持たざるを得ない。また「××（人名）男之墓」、あるいは「〳女霊」などと言うものもあり、意識的に戒名化されていないものもあり、不思議である。しかも、戒名を有しているものと、戒名の無いものが混在していることもある。そして、たまには天保何年、あるいは寛政何年等という年号の読めるものに行き着くこともあるが、基本的には年号を知る手はない。ただ、いくつかの墓石群と比較して行くと江戸中期頃か、あるいは前期かなど伺うことだけは可能である。もちろん「家型墓石」^⑥（社形墓石）があるかないかは、その地域と周辺地域の交流を知る上で重要である。この「家型墓石」のことについては、別稿で触れているのでここでは触れないでおくが、この「家型墓石」について『改訂駒ヶ根市の文化財』では石祠の項目で取り上げられ、栖林寺（せいりんじ）東裏にある坂井家（屋号北）の墓地にある石祠と言う形で紹介されている。引用しておく。

栖林寺東裏の坂井家墓地にある石祠群である。石質は安山岩、この近辺では通称藍濫（らんとう）または伽藍塔（がらんとう）と呼ばれているもので、現在八基であるが、かつては十基あったという。寺院の建物を模したところから名付けられたかも知れないが、形式的には五輪塔などを念頭に入れて設計したものである。基本的には、基壇・室部・屋根の三部分からなり、室部は空洞で木や紙の札を入れて本尊として祀ったり、五輪塔などを納めていた形跡がある。この石祠の中の一つにも、小さな五輪塔が納めてあった。屋根の部分は、その形によって、いろいろな造りに

分類されている。

石祠の制作年代であるが、一説には江戸時代初期以後、一定期間流行して造られ、やがて方形の墓石に移行していったものという。坂井家の石祠群は年代を追って建てられていったものと思われるが、その一つに慶安三年(1650)の年号が刻んである。

なお、この近辺で見られる石祠のほとんどは、室部正面にいろいろな形をした透き間(窓)が作られている。その形が何を表しているのか、今後の調査を待ちたい。

と、記している。このページの写真には石室部の前面に十字架の模様を見ることが出来るのだが、本文ではそのことについて全く触れていない。さらに、光前寺の赤穂十一騎(上穂十一騎IIあげほ)の事にも触れているが、窓の持つ形について即断を避け、「石祠は墓石の代わり、ないしは供養塔としての性格が濃いと言えよう」と結んでいる。しかし、この窓の形状は、どれもキリシタンを意図的に隠す痕跡ではないかと考えている。これらの模様が彫られた年代については、光前寺の「赤穂十一騎」の墓は大坂夏の陣で討ち死にし、徳川方から大阪方に参戦した者の名前が調べ上げられた(村澤吟治郎編『赤須・上穂旧記録』上伊那史談会、昭和十四年(1939))という歴史を踏まえて思慮すると、幕府方の監視が落ち着き、戦死した彼らの年忌に伴って供養塔あるいは墓石として元和二年(1615)と元和五年(1618)の間に設置されたのではなかったかと考えている。慶安三年の年号が栖林寺のものにあるとすることは、大坂夏の陣以後三十年を超えて受け継がれていることを意味しよう。キリシタンが伊那界限にいたことを裏付けることとしては、駒ヶ根市に伝わるキリシタンとして処刑された直指人丹瑞和尚とその父の伝承を考えれば可能であろう。さらに興味深いことは父親をキリシタンとして処刑された幼少期の丹瑞は、蔵澤寺乾安音貞和尚の指示のもと三州金龍寺で寛文十二(1672)年に得度

石の仏に見る隠された顔

したと言われる。この金龍寺は愛知県北設楽津具の寺であるとされている。つまり、愛知県北設楽郡は津具(現在)の金龍寺は駒ヶ根とは縁が深かった。それは、慶長四年(1599)愛知県北設楽郡津具村金龍寺の五世来円宗擦大和尚が、澤蔵寺の寺門を復興し中興開山となっていくことから指摘できる。このことは、別所街道あるいは三州街道を媒介として東三河と伊那地方でも、寺院が密接な宗教的・経済的な活動を行っていたを示す証でもある。この寺院の活動に関連するのが、石工の存在であろう。特に高遠の石工の歴史は古く、関東などでも活躍していたと伝えられている。また、高遠の石工である守屋貞治の作仏が愛知県北設楽郡設楽町の名倉でも見ることが出来る。この地は、三州金龍寺のある津具の近くでもある。つまり、伊那谷の石工達が北設楽界隈でも活躍し、名も無き多くの石工達はその痕跡を残したことの意味すると言える。さらに、駒ヶ根市はこの蔵澤寺の三門について興味深い指摘をしている。この寺の三門は裏・表が反対を向いているという。この三門は九代大胤玄枝和尚が、高遠の伊藤常八に命じて寛政九年(1798)に完成させたのだが、この三門の表門は入口に対して反対になっているという、理由は、武家封建の時代の中で、百姓庶民の菩提寺の三門造営は、格式を以って許さずとの達しが藩からあったことによるという。玄枝和尚は、百姓庶民も、武家将軍も、修行道場及び祖先菩提のために造営せる菩提心は同じとして、命に従わず、三門を造営し、唐破風を本堂に對せしめ、一計をめぐらし、小鐘樓懸垂の梵鐘を懸げ、鐘樓堂と称し、武家の威圧に屈することをしなかったという。

注目したいところは、一計をめぐらすという表現であり、武家の威圧を巧みに交わしていることである。この発想は、この次で述べる如意輪観音の手の位置が仏教美術の儀軌にそぐわなくても「菩提心」は変わらないのだという宗教者の意地に通じるのかも知れない。

★★ 石仏と石工

石工達によって彫られた石仏が、誰に依頼されたものかは判らない。だが、伊那の高遠は京極マリア、高知たかちというキリシタン大名が飯田高

遠を領していたことを考えれば石工達の間にもさまざまな工夫が芽生えていたことは不思議ではない。さまざまな儀軌に縛られた作仏の中で手の位置が逆の如意輪観音など、反儀軌的石仏が見られてもおかしくはない。そこに秘められていた想いが何であつたのか、と路傍の石仏を見ると考えさせられてしまう。ここには、明白な非仏教的な信仰告白が隠されているのではなからうか。だが、同じ思いを有するもの達へのメッセージならば、仏という日本的な姿を通じても意味は通じ合う。

不特定多数の中で一人でも、共通する価値観や意識を有するものが見れば明白なものとなる。民俗的な意識から子安観音を見れば「子供の成長」あるいは「早世した子の幸せ」を願うものとなる。だが、そこには民

俗的意識下での石仏観が顕れてくることになる。これは、地蔵あるいは子安地蔵の場合でも同じである。この種の石仏の存在が意外に多いのではないかと考えられる。特に愛知県北設楽から豊田市界限が顕著である。この地蔵は各地の『石造文化財』などを参考にしようとしたとき、ただ「地蔵」という項目の中に収められていて、それが双体地蔵であるのか、子安地蔵なのか読み取れないものが多かった。ただ、豊田市の資料では勝軍地蔵は、別項目になっていた。そして、地蔵が錫杖を持っているのか、両手で宝珠を持っているのかと言う細かい説明がないものもあつた。初めは子供を抱く地蔵の背景に幼児の死亡率という社会的、歴史的問題があつたのか、とも考えてみたが錫杖に十字架を見たとき、単なる民俗的視点の地蔵では読み取ることが出来ない領域がある事を知った。

各地の資料館、博物館にはキリシタン禁令の高札、文書の類いが展示されている。しかし、見る側にとって、それら展示物によって、その地のキリシタンが禁令によって消滅したかのような印象を与えてくる。巷に潜伏し、ひっそりと生き抜こうとしていたかは、これらの展示資料では判らない。踏み絵などの話は尾張部とは関わりがないことのように思われてしまう。だから、路傍の石仏に施された、些細なメッセージは歴史の流れの中で理解できなくなっているのかも知れない。しかし、これら石仏の小さな痕跡



図-1 (左)長野県小布施、如意輪観音像、図-2 (中・左)小布施、図-3 (中・右)愛知県知多半島の東浦、越境寺の如意輪観音像この越境寺にはキリシタン灯籠がある。通常には如意輪観音の右手が頬に来る。図-4 (右)山内強『会津のキリシタン』風林社 昭和59年による。132頁下郷町音金

図-6 小牧市岩崎・観音山
顔に十字架も見える。錫杖の頭にも十字架がある。



図-5 東栄町下田 長養院
四角の錫杖の頭に十字架。





図-7 長野県駒ヶ根市光前寺
メッセージに十字架



図-8 愛知県北馬頭郡津具設楽
メッセージに十字架



図-9 長野県駒ヶ根市桃源院
メッセージに十字架

る。ここではいくつか顔に十字架が見える石仏を紹介してみたい。目と鼻(鼻梁)をそのように見る事には見解の相違は出てくる。通常の石仏群にそのような事例を見る事が少ないことから、これらの石仏に見る十字架が偶然的の産物ではないと考える。また、注意すれば彫りの深い顔と見る事の出来るものもある。

★★★ 尾張・名古屋周辺を見る

名古屋市内や尾張一宮、清洲界限にはキリシタンの処刑場があったことが知られている。特に名古屋市内の栄国寺は中区東別院の脇にあたり、尾張藩二代藩主徳川光友が寛文五年(1665)に近くの手本松原の

石の仏に見る隠された顔

は、信仰に生きようとした人々を繋ぐメッセージではなかったか。しかも子供の幸せを守る地藏、子供を授けてくれる観音という仏教民俗的要素も加わっているから、はっきりとした姿が消えてしまう。つまり、二重、三重のメッセージが上書きされてくることになる。しかし、石の仏達はその手にする錫杖や、本来の姿勢とは異なる姿形を通して、今でも明確なメッセージを発信している。

メッセージはさまざまな形で発信されている。その中の一つが、石仏の顔に見る十字架である。太陽の光の加減で初めて意識できたのが新城市四谷方瀬の双体仏であ

刑場で処刑されたキリシタンの人々の霊を慰めるために建立したという。そこには初代藩主徳川義直のころ、処刑場があり藩主の側室が処刑を止めるように懇願したという。結果、手本松原の処刑場は清洲の土器野(かわらけの)に移されたといわれる。この藩主義直の側室(貞松院)の下屋敷が今の西区の円頓寺付近にあったという。この円頓寺には、鬼子母神が義直の側室によって寄進され、さらに名古屋城天守閣の棟木の余材が用いられたという(円頓寺脇・説明文)。また、義直公の奥女中がキリシタンであった事が判明した事件もあるという。この奥女中が正妻春姫に付いて紀伊(和歌山)国(春姫は紀州徳川家からお興入れしていた)から来ていた女性か、側室付きであったのかは不明である。いろいろと資料を見れば、一般庶民ばかりだけではなくお城の中でもキリシタンに纏わる問題を抱えていたことが窺うことが出来る。そのことは、家康の駿府城でも同じ事であった。幕府からの禁令お達しに対して尾張藩は、江戸に、キリシタンに対して確固たる姿勢を持っていることを示さなくてはならなかった事情もあったのであろう。美濃の可児(旧塩村)でのキリシタン捕縛などは単独の事件としてみるべきではなく、江戸表に対するポーズと見るべきだったかも知れない。つまり尾張国内で大々的に事件が明るみに出れば大きな政治的、経済的混迷が生じることを避けるために、表向きは取り締まりをしているように見せたのが美濃可児でのキリシタン捕縛であろう。そうすることによって、尾張領内では、この種の問題は「見せしめ」として沈静化され、キリシタン問題が表面化しないように工夫されたのではなかったか。名古屋市内のお寺や、墓苑にはキリシタンに関わる遺構を見ることが出来る。名古屋の平和公園には、建中寺を始めとして名古屋市内の多くの寺院が、戦後の名古屋市の都市計画で墓地が集約させられている。いくつかの寺院の平和公園の墓苑には古いものを見ることが出来ることもあるが、移転に伴って整理されてしまったところもあるようだ。しかし、墓苑の隅の方に追いやられてい

石の仏に見る隠された顔

る墓石や石仏を見ていくと興味深いものが沢山出てくる。そのような一例が名古屋市昭和区のお寺の墓地にある。住職によると、その墓の主は紀州から春姫について名古屋に来て薬種問屋を営んでいたという。また、その寺には義直公の御殿医だったと言う人物の墓（住職の話）もある。この人物の名前を聞き漏らしてしまったが、この人の墓石が興味深い。六尺ほどの高さの墓石が五角形（駒形板碑に）作られその中は人形（？）状に削られ、そこに名号が彫られ、彼の名前とおぼしき四文字が名号に続くのである。名号は「南無阿弥陀仏」であるが、この六字の中で、初めの「南」が他の文字に比べると丸字になっているのである。他の文字と比較しても異質と言わざるを得ない。そして、南の部首が十、それが十字架に見えてもおかしくはないが、文字の字体が異なること、名号に続いて「盛安道栄」と読める四文字の存在が気になることである。名号の両側には寛政四年（1792）九月五日の文字がある。

筆者はこの名号の下の四文字を、洗礼名と理解したい。名古屋近辺の犬山市には国宝の茶室「如庵」があるが、これには織田有楽齋（キリシタンとされている）が関わっている。ところで、尾張藩の奥医師に野間家があるがこの先代、野間隆長は道安と称していた、ことが知られている。その子、野間隆紀（庄次郎）彼は尾張藩の奥医師となるのだが、「自求」と称していた。道安は、彼のもう一つの顔を示す物であったのかも知れない。それは、同じ出自と考えられる野間玄琢、こちらは曲直瀬玄朔の弟子として徳川家光にお目見えする立場を保ち、子々孫々幕府医として勤めているが、この墓石の碑文が尾張藩の野間家と野間玄琢が繋がらない事を示す背景にこの碑文があるのかも知れない。

さて、名号の話に戻る。このような名号の、丸文字の「南」を筆者は木曾の奈良井の宿で見ている。さらに徳本上人の名号及び花押にも

共通していると
思慮している。

この徳本の書は、
やはり「南」と
「無」に特徴を
見ることが出来る。
「南」は部
首に、やや傾い
た十字架を、中
にも十字架を見
ることが出来る。

そして「無」は冠の部分に特徴的に
二人の人物（？）、親子か微妙に大
小の○が書かれているように見える。
花押部では十字架を頭すかのように
十の字と、台の前に礼拝するかのよ
うに見える。名号の字をこのように

解釈することが可能なのは判らないが、碧南市の海徳寺（浄土宗西山深草派）にある徳本上人の名号碑の花押が潰されている。中津川、奈良井（木曾宿）などで見た徳本の名号碑ではそのような花押を潰すという事例はなかったが、知多碧南界隈では、キリシタンについて監視が厳しかったのかも知れない。この徳本上人の名号は浄土宗の寺院で大事に保管されている模様であり、それを知るだけでも興味深い。この徳本と同じように念仏教化をしていたのが佑天であり、彼の名号碑も伊那地方では確認できる。佑天の名号碑でも「南」という文字が丸く書かれる特徴があり、しかも部首の「十」は興味深い。信濃に念仏布教に力が注がれた理由が、美濃に信者がいると書いたパジェスの『日本切支丹宗門史』に求めることが出来るかも知れない。もちろん



図-10 昭和区のお寺・寛政四年九月五日南無阿弥陀仏の下に「盛安道栄」と記されている



図-11 木曾路・奈良井（佑天の字か）



図-12 徳本の名号の一部 (個人蔵)

慶長年間(慶長十年1605、家康將軍職を辞している)という时期的な違いはあるが信濃では京極マリア、夫の高吉はすでに信長の時代に受洗していたという。そして高知は慶長元年(1596)に受洗したという。高次は母マリアと妻、兄高知からの誘いでクリシタンとなったが、

家康には伝えていないという。高知が伊那を領有していた期間が文禄二年(1593)から慶長五年(1600)のおよそ八年であったが、この間伊那高遠には宣教師が来ていたという。高知は、高遠に来ていた宣教師から洗礼を受けたとされている(『信濃のクリシタン』長野カトリック教会編長野カトリック教会発行、昭和35年、12〜14頁)。この間、伊那から諏訪にかけて布教されたクリスト教は根強く一般民間に根を下ろしていったようである。その背景に信濃地方のクリシタンの地盤(京極高知の力による)と、人物往来に伴う上方のクリシタンの移住にあわせて、迫害による潜入が美濃尾張をはじめ諸国からあり、また断続的な神父による布教が行われた結果相当多数のクリシタンが各地に広く分散していたものと思われ、殉教や迫害も右に記した以外にもあったかも知れず、潜伏し続けたクリシタンも多かったと推定されるのである。(前掲書「中山道」13〜20頁)。

江戸時代後期、私度僧型の念仏聖として徳本が注目を浴びたきっかけは険しい山奥に草庵を結び励修念仏を行ったあと、紀州藩主との出会いで奇瑞を示したからと言われている。しかし、徳本上人が関東、

石の仏に見る隠された顔

つまり江戸周辺から駿河、伊豆、信濃、美濃、尾張、三河に多くの念仏講を形成し、多くの人々に受容されていった地域はクリシタンの潜伏地域とも重なるという面で興味深い。本来ならば徳本以外の同時期の念仏聖などを引用しなくてはならないが、ここでは触れないでおく。さて、これまでさまざまな図柄に巧みに意図が隠されている事は指摘したが、それは徳本が配る名号にも見ることが出来るのではないだろうか。名号に一種の暗号が秘められていたのかも知れない。筆者は、佑天の名号にも、唯念の名号の「南」に関心を持っていて。名号そのものではなく、「南」という一字に信仰対象の図柄が隠されている暗号、それは名古屋の栄国寺の不動明王にも見ることが出来る。そこには「J」イエス」が巧みに隠されている。この不動像は御獄教の一派である人々の信仰対象であると言われている(詳しくは『信濃のクリシタン』長野カトリック教会編 長野カトリック教会昭和35年)。そこでは、宮城県史編纂委員会が岩手県東磐井郡大津保村で発見された荒神像についての記述もあり、興味深い。仏教的でありながらも「信仰」の形を巧みに「暗号化」して隠すこととは見る側の眼力が試されている事にも通じる。だからこそ、「クリシタンの痕跡を探す方法」は一筋縄でいかない。そこには一種の知恵比べがあると云える。石仏あるいは石造、そして宗教的図匠の見方として、宗教的象徴に対する情報量が問題であるかも知れない。それには、すぐに読み解かれないような工夫の問題もあり、社会的に厳しく禁じられているからこそである。だから、解る人には解って貰わなくてはならず、気づかれたとしても「言い訳の出来る」仕組みを有していなければならなかったのだ



図-13 栄国寺所蔵の不動明王「J」の字が隠されている。これについては、『信濃のクリシタン』長野カトリック教会昭和35年 30頁に詳しい。

石の仏に見る隠された顔

ある。そういう意味で見ると、尾張、三河各地で見る「鯖大師」あるいは「鯖弘法」なども問題になってくる。さらに安曇野などの双体道祖神(男女で杯ごとをする形)などは双体仏の変形形と見ることにも必要になる。この双体仏については聖書の「レビ記12・1-8」の「幼子を神殿に伴う」話(産後の浄めの期間を経過して)、及びシメオンが「救世主」の出現を言祝ぐルカの福音書の場面を想起させてくる。後に『石造文化財』について触れるが、双体仏が地蔵、道祖神の中に含まれてしまっていたり、観音という範疇に、幾種もの観音が含まれていたりするものもある。このようになる理由はよくわかる。それは、判りやすいからである。やむを得ず地蔵、観音あるいは道祖神に分類せざるを得ないからに他ならない。

★★★ これからの視野について

これまでの調査を経て、気がついたことは多々ある。その中の一つは石仏と言う理由だけで、キリシタンの要素が見過ごされてしまっていると言うことである。地蔵、観音あるいは庚申、そのほかの諸々の石造文化のものは、基本的に日本的な文化の流れに位置している。基本として仏教的(あるいは、仏教民俗的)範疇に収められ見過ごされて来たことになるのである。だからこそキリシタンを取り締まる側からのお咎めが、あったとしても回避できたのであろう。そのことは、キリシタンの要素(たとえば十字架)が巧みに隠されているにも拘わらず、「言い逃れ」が可能な緩さの中で事が進んでいたのではなかったかと考えらる。

その最たる石造が「鯖大師」ではなかったらうか。鯖大師の伝承は四国八十八カ所、阿波七福神霊場を問題としなければならぬかも知れないが、ここでは大師が手にする「魚」を問題としたい。名古屋市

内、中区の寺でも見ることができ、中馬街道、中山道、天竜川沿いのいくつかの寺院でもこの鯖を手にする大師像を見ることが出来る。鯖を素直

に魚と理解すればイクトウスに通じ、キリスト教の信仰告白を意味して白を意味する象徴としての魚を手にする仏教的石像が、中馬街道、別所街道、中山道などのお寺の脇や、門前などにひっそりと立っていることの意味を考えると、なかなか面白いものとなる。寺の境内の脇や、門前の端などで眼につきにくく、なかなか気がつかない。これは咎められた際の逃げ道かもしれない。つまり、「寺には関わりがない」とする方便であらう。しかし、この魚に気がついた人へは、信仰を有する人たちの存在(コンフラリア)を陰ながら感じ取ることの出来るメッセージと見てもおかしくはない。この

「魚」は魚藍観音(三十三観音の一つ)にもつながる。さらに静岡県浜松市細江の東林寺の魚を持つ羅漢、あるいは細江の知足山全得寺の下半身に魚の鱗模様を持つ羅漢にもつながると考えている。特に、この羅漢像は一体とも細江のものであり、姫街道に係わりがあるのではと考えると、すると興味深くなる。これら石仏と並んで祀られているのが庚申、あるいは青面金剛であるが、このことについては稿を改めて考える。同じような傾向を持つのが子供を抱く地蔵、子安観音であったと考える。それは民衆の気持ちや祈りの対象でもあったからであり、権力がむやみに介入できなかった領域だったからであらう。

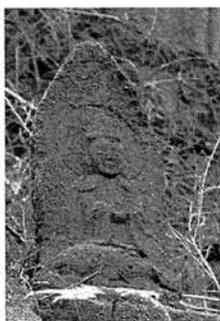


図-15 新城市四谷
坂第十八番魚藍
観音足下にも鯖
の近所(旧別所
道)の脇道(か)



図-14 設楽町
田峰 旧別所
道に沿うという

註

- ① 拙論 「石の仏に見る隠された顔——石仏のイコノロジー②——『言語・文学・文化』 第14号(通巻73号) 東海学園大学 平成二十七年(2015)
- ② 拙論 「石仏に見る隠された背景——石仏のイコノロジー——『東海仏教』第六十輯 東海印度学仏教学会 平成二十七年
- ③ 『日本史再検証 キリシタン』別冊宝島2485 2016年94頁) 拙論 「石の仏に見る隠された顔——石仏のイコノロジー③——『言語・文学・文化』 第15号(通巻74号) 東海学園大学 平成二十八年(2016)
- ⑤ 『改訂駒ヶ根市の文化財』駒ヶ根市の文化財編集委員会 平成24年。124頁
- ⑥ 前掲書 157頁
- ⑦ 守屋 貞治(もりや さだじ、1765年—1832年)彼の父も、祖父も高遠の石工として知られている。設楽町の名倉に彼の彫った石仏がある。
- ⑧ 註②参照
- ⑨ 名古屋大学付属図書館2008年春季特別展 濃尾の医術——尾張藩奥医師 野間家文書を中心に——名古屋大学付属図書館・付属図書館研究開発室 2008 3頁
- ⑩ 江戸時代後期の浄土宗の僧侶。徳本上人は江戸時代の念仏行者、南無阿弥陀仏を唱えて日本全国を行脚し、庶民の苦難を救った。信者は近畿、東海、北陸、信州、関東地方にも及び現在でも「徳本講」は引き継がれている。徳本上人の書かれた「南無阿弥陀仏」の文字は「徳本文字」丸みをおび、終筆がはねあがり、縁起が良いいといわれ、蕙文字とも呼ばれる。徳本の教化活動については、

以下の本に詳しい。

西海賢二『念仏行者と地域社会 民衆の中の徳本上人』大河書房 2008

- ⑪ 佑天 祐天(ゆうてん、寛永14年4月8日(1637年5月31日)享保3年7月15日(1788年8月11日))。浄土宗大本山増上寺36世法主で、江戸時代を代表する呪術師。この江戸期の念仏行者として、他には徳本の名が知られているが、彼ら高僧は人々に宗教的側面だけでなく、難産などの苦痛から逃れるために拝復名号を授与するなど数々の現世利益があったと伝えられている。この時期人々の生活に民間宗教者が深く関わっていたことが知られている。西海賢二『念仏行者と地域社会——民衆の中の徳本上人——』大河書房(2008)氏は江戸期の民間宗教者をめぐって彼らの巡錫した地域などについての考察をしている。时期的に、信濃で徳本が入替替るよう動いていることを知ることが出来る。21〜29頁 徳本上人の教化活動の結果は各地に残る名号や、名号碑の多さから容易に推察することが出来る。しかし、気になるのは信州、美濃などの中山道である。
- ⑫ 聖書のルカによる福音書(ルカによる福音書2:25-35)などに目を通すと子抱き地蔵には異なった姿を想定することが出来る。また、双体仏を重ね合わせる事が出来ればエルサレムの宮に赴いた「マリアとヨゼフ」の姿を意識することも出来る。だが、双体仏は一般的に道祿神として受け止められ、賽の神として分類されている事が多い。つまり、我々受け止める方の宗教的情報の量、質の差によって見方が変化してくることになる。それは、同じ石仏でも正反対なものとなって顕れることになる。この双体仏は北設楽でも墓石群の中で見られることも出来るが、「家型墓石」の中に納められていることもある。それを福音書的にいえば「救世主」の出現を待ち望んでいる者達の墓と言う暗示と受け止めるには早

計かも知れない。しかし、長野県の小布施や、駒ヶ根などでも双体仏があることを考えると、安曇野などの道祖神等との比較検討も求められることになる。

- ⑬ 『小布施町の石造文化財』小布施町教育委員会 平成元年(1989)によれば、小布施町の福原、六川地区の共同墓地や岩松寺の墓地などで、一石に二体並んで彫られている地蔵を見かける。これは「双体供養仏」あるいは「双体地蔵」といい、の兄弟、姉妹を供養した物であるという。まれに、片方が地蔵、もう片方が観音の双体供養仏もあるが、これも子供の姉と弟か、兄か妹を示す墓標である。19頁

拙論「石仏に見る隠された背景——石仏のイコノロジー——」『東海仏教』第六十輯平成27年 及び 拙論「石の仏に見る隠された顔——愛知県東栄町の石造文化財を中心に——石仏のイコノロジー③——」『言語・文学め文化』第15号(通巻74号)平成28年

- ⑭ 聖書 詩編 詩篇20篇が戦いの前にとりなす祈りであるとすれば、詩篇21は戦いの後に感謝をささげる祈りである。そして詩編22は神に見放されながらも、神に対する呼びかけを行う歌であると言える。わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず呻きも言葉も聞いてくださらないのか。わたしの神よ昼は、呼び求めても答えてくださらない。夜も、黙ることをお許しにならない。

詩編23は、神に対しての師依頼を表現するものと理解できる。詩編26は、誠実に神に従って生きて事を訴える内容である、と言える。

ここで、月待ち、日待ちのを取り上げるのは、一般に十五夜の月待ちの他になぜ二十二夜、あるいは二十三夜等の月待ちが問題となるという背景が読み取れないからである。二十二夜の方が

石の仏に見る隠された顔

男性中心で、次の日が女性中心であったと言うことに興味を引かれる。この問題は「庚申信仰」とも関連して考えると考えられる。

- ⑮ 『豊田市の石造文化財 豊田市歴史民俗調査報告書 第1集』豊田市教育委員会 2002年によれば、日待ち月待ち塔は総数9,358の内2例(しかも御船町山屋敷と少し西側にある田畑日向の二カ所に限られている)を数えるのみである。それに対し、同じ矢作川流域にある串原村では調査総数874基の内、月待ち塔は9基を数える。しかも、17集落数の内6集落に限られるが、大平、松林、木根地区の三カ所には2基、松本、大野、森上では1基がある。興味深いことは、大平区には子安神があると言う(ただ、「子安神」と刻まれた文字碑である)。「串原の石仏」串原村教育委員会昭和55年(1980)による。